

みことばを友に

2021年11月21日発行 第2号 神言修道会聖書使徒職委員会

「聖書についての誤解」

私は聖書学の専門家ではありません。司祭になるための過程の中で、もちろん、然るべき勉強はしましたが、聖書との付き合いは一生に渡ります。読めば読むほど気づかなかった側面が見えてくることもあれば、かえって分からなくなることもあります。多くの教父たちも言っていることですが、私の経験でも聖書は源泉のようなものであって、乾くどころか、何度汲んでもいつも新たな水がそこから湧いてきます。

私は普段聖書を全く知らない、読んだことのない学生を相手にしてお話ししていますので、専門的な知識というよりも、まずは聖書に対する誤解や思い込みを無くそうとしています。また、故郷の母もそうですが、教会の信者さんたちであっても、聖書に対して距離感を感じる方も多いでしょう。そういう経験からも、どのように聖書をアピールすれば良いか、あるいは、聖書に対して一番持って欲しい気持ちは何かをよく考えます。

まず、アドバイスをするとすれば、聖書を読んだり聞いたりするときに、全てを理解する必要はないと言いたいです。ゆっくり考えて後から理解することもあります。経験を積んでやっと理解できるようになることもあります。何度も同じ話を聞いて初めて分かることもあります。また、自分で調べないと分からないこともあります。しかし、最後まで分からないこともありますし、また、あっても良いです。聖書には多岐にわたる物語や、様々なジャンルがありますから、少なくとも何かには皆親しみを覚えることができるはずです。何より、一部が分からないことを理由に、続きを読まないことは一番残念です。

また、言うまでもなく、聖書は文学作品として書かれたという側面もあるのですが、人間の力だけで言葉を分析して理解するようなものではないという点も重要です。神の声と教会の伝承の声が両方その中に響き合っ

います。一つの聖書箇所を解釈するときに、文脈から切り取って読むことは不可能です。それは色々な宗教の過激派がすることなのです。また、それに続く何百年の伝承から切り離して解釈することも不可能でしょう。神の声は書かれた聖書の文字にしか綴られていないわけではありません。ですから、なるべく聖書を全体として考え、単独の物語の寄せ集めとしてではなく、続けて読み、似たようなトピックを合わせて考えることがおすすりめです。一つ概念を似たような別の概念をもって解釈するというルールもあるのです。

それから、普通の私たちは翻訳文に頼るしかないという限界があるのは現実です。しかし、少なくとも二つの極端を避けることはできます。それは、全て大事な問題については聖書に何かを書いてあり、聖書に明示的に書いていない事柄は重要でない、という考え方です。例えば、妊娠中絶や死刑について聖書自体には明確に書いてありません。だからと言って、そこから何も教えが読み取れないとは限りません。もう一つは、聖書に書いてあることはすべて同じように大切である、という考え方です。つまり、ジャンルも弁えず、全てを文字通りに読めばどうなるかということ、天地創造を物理学や天文学の報告書として読み、詩歌を歴史的な資料として読んでしまいます。ただし、ここで言いたいのは、すべてがただ比喩的な話であり、それには霊的な意味しかない、ということでは決してありません。何しろ、比喩というものはいたって真面目な手段であり、「あたかもそうであるかのようなものだ」という意味ではありません。



聖書の中のカタカナ言葉

「イエス」: 新約聖書の原語であるギリシャ語では「イエスース」ですが、そもそもヘブライ語の「ヨシュア」(旧約聖書に登場するモーセの後継者と同じ名前。より正確な発音は「イエホシュア」)に由来する名で、その意味は「ヤーウエは救い」です。以前は日本のカトリックではラテン語読みの「イエズス」表記を使うことが多く、新共同訳聖書の前の共同訳聖書では、「イエス」という表記になっていました。

最後に、キリスト者には何よりも聖書に対する誇りを持っていて欲しいと思います。なぜなら、例えば、聖書は世界で一番売れている書物であるだけでなく、古代の基準に従えば他のどの資料にも負けないくらい信憑性が高い書物だからです。いまだに謎であり続ける人物や地名もありますが、多くの情報は既に考古学的に証明されています。重複もあり、お互い異なる記述もありますが、その違いはとても小さなもので、それぞれ正反対のことを言っているのではなく、むしろ、異なる側面から同じことを書いています。それぞれ違う時代に別の著者によって書かれたにもかかわらず、内的な一貫性が見られます。また、聖書全体を収めている写本は確かに少ないのですが、欠けている部分を別の写本で補えば、必ず聖書全体が復元できます。しかも、残っている資料はイエス・キリストにとっても近い時代に執筆され、また、最も古い部分が書かれた時期から一番若い部分までの期間も非常に短いです。それは他の様々な叙事詩や皇帝たちの伝記については到底あり得ないことなのです。

聖書は、大昔の書物として読むことが一番相応しくないことです。もちろん、古いテキストですし、当時の基準や価値観に照らし合わせて読むことも大事です。しかし、聖霊の力に助けられて読む人は、それを今ここで自分自身に、また、私たち共同体全体に語りかけてくださる神の言葉として読むことができます。いや、そういう読み方しかありません。具体的に何を言おうとしている言葉であるかということ、基本的には「あなたは愛しいものだ」「あなたの存在を喜んでいる」「あなたを誰よりも愛しているから、生きていてほしい」という神の言葉です。今ここで生きていて欲しいだけでなく、永遠に生きていてほしい、ただ今幸せになって欲しいのではなく、永遠に共に幸せでありたいという素晴らしい神の言葉なのです。

(Jakub Rajcani)

「ベツレヘム」 (マタイ 2:1、ルカ 2:6 など): 古代イスラエルの王ダビデの出身地であり、その名はヘブライ語では、「パン(レヘム)の家(ベート)」を意味します。ご自分を「命のパン」(ヨハネ 6:35)と言われたイエスの誕生物語の舞台ともなっている町です。

「ヘロデ王って、何人もいますか？」

先日、ある先輩から「今日の福音朗読に出てくるヘロデは、幼子イエスを殺そうとしたあのヘロデ王ですか」と質問されました。その日のごミサの福音朗読では、ルカ福音書9章1-9節の箇所が読まれ、洗礼者ヨハネを殺したヘロデが出てきたので、私は「いや、違いますね」と答えました。その質問を聞いて、新約聖書にはヘロデという名前が数回出てきますが、必ずしも同じ人を指している訳ではないので、確かに誤解されやすいなあと思っていました。

さて、ヘロデは一人の王の名前だけではなくて、一つの王朝の名前でもあります。そのヘロデ王朝の大元となるヘロデ大王には何人もの妻がいて、その息子たちや孫たちは「ヘロデ」と名付けられています。そのため、ヘロデという名前を持つ人物が何人もいることになる訳です。新約聖書を読む時に混乱しないように、福音書と使徒言行録に出てくる「ヘロデ」と呼ばれている人々のことを確認したいと思います。

まず、最も有名なのは、イエスが誕生した時のヘロデです。彼はヘロデ大王と呼ばれ、マタイ福音書とルカ福音書のイエスの誕生物語に登場しています（マタ2：1；ルカ1：5）。ヘロデ大王は、ベトレヘムとその周辺の子供を皆殺しにした王です。彼は非常に権力に執着しており、妻や息子を含め、自分の王位を脅かすような人物を殺害した王として知られています。しかしその一方、土地の改革や街の建設などを推進した優秀な王だということで、「大王」と呼ばれる一面もあります。

次に福音書に出てくるのは、洗礼者ヨハネを捕まえて、殺害したヘロデです。マルコ福音書は彼のことを「ヘロデ王」と呼んでいます。マタイ福音書（14：1）やルカ福音書（3：1, 19；9：7）にあるように、彼は「王」ではなく、「領主ヘロデ」と言った方が正確です。彼はヘロデ大王の4番目の妻の息子で、ヘロデ・アンティパスという名前です。彼が支配していたのは、パレスチナ地方の北に位置するガリラヤとペレア地方のみです。ヘロデ・アンティパスはヨハネが生き返ったという噂を聞いて、イエスに会ってみたいと考えていました。やっと、イエスの裁

判の時に、その機会が巡ってきたのですが、ルカ福音書にあるように、裁判の際、イエスは彼の質問に一つも答えませんでした（23：6-7）。

もう一人のヘロデは、使徒言行録 12 章 1 節に出てきます。彼も単に「ヘロデ王」と呼ばれていますが、彼はヘロデ大王の孫の一人で、アグリッパ一世として知られています。彼も巧みな政治家であり、祖父のヘロデ大王が支配した地域をローマ皇帝から任せられました。また、彼はユダヤ教の律法を熱心に守る人で、彼がヨハネの兄弟ヤコブを殺し、ペトロを牢に入れたのは、そのような熱心さがその背景にあると思われます。ちなみに、使徒言行録 25 章 13 節以降でパウロの裁判に関わる「アグリッパ王」はヘロデ・アグリッパ二世のことです。彼はこのアグリッパ一世の息子に当たります。

以上、福音書や使徒言行録にはヘロデという名前が様々な場面で出てきますが、必ずしも同じ人のことを指している訳ではないので、少し注意する必要があります。いずれにしても、新約聖書がイエスや弟子たち、及び初代共同体がヘロデ王朝の王たちと敵対関係にあることを描いていることは確かです。
(M. Pale Hera)

「インマヌエル」(マタイ 1:23)：夢の中でヨセフに告げられたイエスの誕生に関する、預言者の言葉に出てきます。ヘブライ語で「神(エル)は我々と共に(インマヌ)おられる」を意味します。

聖書週間のすすめ

毎年 11 月の第三日曜日からの一週間に設定されている「聖書週間」ですが、今年は 11 月 21 日～28 日で、「ヨセフ年」（2020 年 12 月 8 日～2021 年 12 月 8 日）と『『愛の喜び』家庭年』（2021 年 3 月 19 日～2022 年 6 月 26 日）が重なっていることにちなみ、「**家庭－試練や苦境における喜びの源**」をテーマとしています。カトリック中央協議会からお知らせが出され

ており (<https://www.cbcj.catholic.jp/2021/10/15/23198/>)、毎年発行されている小冊子『聖書に親しむ』のPDF版も同ページからダウンロードできます。



家庭、家族に関係する聖書箇所をほんの一部ですが以下に挙げますので、この聖書週間をきっかけに、これらの箇所を読んで味わい、喜びの源としての家族について思いをめぐらせてみてはいかがでしょうか。私たちの家族としてのあり方を振り返るヒントとなるかもしれません。

家族としての信仰共同体

「あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族」(エフェソ 2:19)

この節の直前では、キリストが十字架を通してイスラエルの民と異邦人の間の敵意という隔ての壁を取り壊し、平和を実現し、和解させて一つの体にした、とされています。私たちはそれぞれどんな背景を持っていてどんな異なる歩みをしてきたとしても、キリストの内に一つの家族となることができる、という希望が示されます。

「ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人に対して、善を行いましょう」(ガラテヤ 6:10)

更に、もし信仰によって真に家族となっているのであれば、互いに愛を持って助け合い、善を行うものだと言われます。

母である神

「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも わたしがあなたを忘れることは決してない」(イザヤ 49:15)

「母がその子を慰めるように わたしはあなたたちを慰める」(イザヤ 66:13)

神に性別はありませんが、この世界の言葉でその姿を描写せざるをえないので、どうしても表現に限界があるたどえになってしまいます。聖書が書かれた時代・社会の状況（特に家父長制など）が「父である神」のイメージをつくる要因になったのは疑いがありますが、「母である神」のイメージも、少ないながら聖書には描かれています。母親が長い間胎内に宿し、お腹を痛めて産んだ子どもに対して抱く深い愛情が、神の人への愛にたとえられています。

親子

放蕩息子(ルカ 15:11-32)

最も有名な新約聖書のたとえ話の一つです。弟息子は父が生きている内に遺産相続を求めるといふひどい仕打ちに加え、その愛を振り切って「遠い」国へと旅立ちます。彼はそこですべてを失いますが、父のもとに帰り、その愛の中で「死んでいたのに生き返り」(15:24) ます。

父がいる家に帰ってきた弟に対し、兄は腹を立て、その家に入ることをできません。更に父に対し、弟のことを「わたしの弟」ではなく「あなたのあの息子」(15:30) と第三者的に呼び、自分と関わりないものとしします。しかし父は兄息子も弟息子も愛しているのだと彼をさとします。

そんな息子たちをあたたく包み込む父の思いに答えて、果たして二人は兄弟としての関わりを取り戻すことができるのか、たとえ話は結末を迎えずに終わります。同じ問いかけは、親として子として兄弟姉妹として生きている私たち自身の「家族」「共同体」へのチャレンジでもあります。

兄弟

カインとアベル(創世記 4:1-16)

アダムとエバの二人の息子がそれぞれの働きの実りを神に献げますが、神は兄カインの献げ物には目を留めなかったので、カインは怒って弟アベルを殺してしまいます。神に対しても兄弟に対しても、最後まで誠実に向き合わない人の姿が描き出されています。

エサウとヤコブ(創世記 25:19-28:5、32:2-33:20)

イサクとリベカの息子たち、エサウとヤコブは両親の思惑もありつつ、長子権や祝福をめぐる争い、お互いにだましたり殺そうとしたりし、結局袂を分かちます。しかし20年後、二人は再会し、ヤコブは兄にゆるしを請い、エサウは弟を温かく迎えます。緊張感やわだかまりがすべてなくなったわけではないでしょうが、「カインとアベル」のケースとは異なり、それでもお互いに歩み寄る和解がそこにはあります。

ペトロとアンデレ(ヨハネ 1:35-42)

洗礼者ヨハネの弟子だったアンデレは、イエスと出会い、「わたしたちはメシアに出会った」と言って兄弟シモンをイエスに引き合わせます。真に価値あるものを分かち合うことも兄弟であることの素晴らしさでしょう。

本の紹介

『聖書協会共同訳 詩編をよむために』（日本聖書協会、2021年）

聖書協会共同訳の詩編の翻訳事業に携わった5人の執筆者が、それぞれの視点から「詩編」を味わうためのガイドを提供しています。そのテーマは、詩編の基礎的解説である「詩編の基礎知識—構成、技法、研究史、そして……」、歌としての詩編の魅力について語る「詩編に親しむ—心に泉を」、川を描く3つの詩編を取り上げた「川のある風景」、信仰者によるとは思えない言葉を扱う「天を仰いで神に歌う—悲しみ、嘆き、報復の詩がなぜ詩編にあるのか」、カトリックの典礼における詩編の位置づけを述べる「詩編を日本語で歌う—「典礼聖歌」を手がかりとして」です。



後記

昨年に引き続き、今年もこの冊子を発行することができました。多くの方がみことばに親しみ、みことばと共に毎日を歩むきっかけとなることを願っています。

お知らせ

神言会の聖書使徒職委員会ではホームページを開設し、毎主日の聖書朗読箇所についての黙想のヒントなどを掲載しています。また記事の更新をtwitterを通してお知らせしています。どうぞご活用ください。

神言会聖書使徒職委員会ホームページ
<http://svdjpba.net/>



聖書使徒職委員会 twitter アカウント
<https://twitter.com/svdjpba>



2021年11月21日 発行
カトリック神言修道会 聖書使徒職委員会